

紋別勢はリレーで4位に 初のスキーマラソン大会

紋別スキー歩こう会の創立30周年記念事業「第1回紋別スキーマラソン大会」が2月12日、藻別地区の山林を舞台とする10キロの周回コースで開かれました。同会メンバーや市民、それに遠軽バイアスロンのメンバーら120人ほどが参加。起伏の大きい林道コースで熱戦を展開しました。

種目はスキーマラソン（30キロ）、クロスカントリリー



▲山林コースを疾走する選手たち

岡井さんは現在、国富町でやきもの夢工房「トトロの森」を主宰。事件当時は福岡市在住で、野焼きは紋別市と福岡市の都市間交流事業としてスタートしました。韓国、九州、

追悼の炎、今年も赤々と 15回目の「流水野焼き」

レー（3人×10キロ）、歩くスキー（10キロ）の3つ。沼の上出身の本間学さん（遠軽自衛隊、遠軽バイアスロンコーチ）がマラソンで優勝したほか、リレーでも遠軽バイア

オホーツク流水野焼きの会が主催する「流水野焼き」が、今年も流水まつり期間中の2月10日、まつり会場横の特設会場で行われました。大韓航空機墜落事件（1983年）で長男夫婦を失った宮崎県国富町の陶芸家、岡井仁子（ひ

とこ）さんの希望で平成4年に始められたもので、今年も犠牲者の冥福と世界平和を祈る炎と煙が空高く舞いあがりました。

スロンが他チームを圧倒する強さでトップを飾りました。

紋別スキー歩こう会チームは、地元の意地を見せリレー4位入賞と健闘しました。競技後は、大会運営にボランティア協力した藻別町内会の会員らと交流の輪を広げ、来年の再会を誓い合いました。

稚内、そして墜落地点に一番近いモノロン島などでも野焼

きを行っているそうです。

15回目となる今年も、福岡県と宮崎県、大阪府、千葉県などから岡井さん、教え子ら21人も参加し、さまざまな願いを込めた作品を焼き上げました。

岡井さんは「犠牲者の鎮魂と平和の祈りを炎に託してきました。紋別では海難で命を落とされた方も多いと聞いています。これからは祀の原点に帰った地域の行事に発展してほしい」と話しています。



▲流水まつり会場の一角で流水野焼きが行われました

寺井さん全国10位入賞 中体連スキーの大回転で

アルペンスキーの寺井えり

かさん（潮見中1年生）は、

2月8日に新潟県妙高市で開かれた第43回全国中学校スキー



▲1年生ながら全国中体連で入賞した寺井えりかさん

1大会の女子大回転で10位に入賞しました。上位は2・3年生ばかりで、1年生での入賞は大健闘と言えます。

来シーズンの活躍が期待されます。大会には、12種目に全国44都道府県から922人が出場しました。

寺井さんは6日の女子回転では22位に甘んじましたが、大回転では実力を発揮。全国中体連アルペンスキー種目での入賞は、紋別勢として初めての快挙です。来シーズンは、北海道予選で完走すると、タイムにかかわらず全国大会に進出できる権利を手にしました。

▼開会式では幼稚園児も海外研究者を歓迎



最先端の研究成果を発表

北方圏国際シンポジウム海外講師18人も参加

第21回北方圏国際シンポジウムが2月19日から22日まで、文化会館をメイン会場に開かれました。北半球の流水南限という北海道オホーツク海沿岸の特異性や、水海の生物、水産、人工衛星による流水観測、水海航行、さらにサハリン油田開発に絡む油汚染防止対策などテーマは多彩。今年には海外8カ国から18人の研究者・講師を招き、充実した研究発表が繰り広げられました。

改装を終えたばかりの市民会館大ホールで行われた開会式には、関係者や市民など4

00人ほどが参加しました。宮川良一市長、青田昌秋実行委員長らの挨拶に続き、カナ

ダ、中国、イギリス、フィンランド、ドイツ、ロシア、スイス、アメリカなどから招かれた18人の研究者らを紹介。幼稚園児による歓迎セレモニーや一輪車のアトラクションもあり、大いに盛りあげられました。

毎年恒例の特別講演では、テレビ料理番組でおなじみのクッキングキャスター、星澤幸子さんが「北海道



▲特別講演の講師はクッキングキャスターの星澤幸子さん

係などをユーモアあふれる口調で話しました。

同シンポジウムは最先端の研究成果を披露する学会と、市民向けのプログラム（水海の民シンポジウム、こどもと親の流水シンポジウムなど）

は世界一のタイトルで講演。海と山の幸に恵まれる北海道

は、食糧自給率が実質的に200%を超えることなどを紹介しながら、健康と食事の関

が一体となったユニークなものとして知られています。

平成16年7月末の北海道大学低温科学研究所・流水研究施設撤退によりシンポジウム



▲市民向けの研究発表会やワークショップも開催されました



▲関連イベントのホワイトコンサートは、歌手のベギー栗山さんとピアノの秋満義孝さんが出演しました

が存続の危機に立たされましたが、関係者の熱意により開催することが出来ました。今年には北海道大学（現代的教育ニーズ取組支援プログラム）も主催団体に名を連ね、さらに幅を広げています。地元からは昨年11月に発足した「オホーツクの環境を守る地域ネットワーク」も初参加。油汚染ワークショップを主管し、美しいオホーツクの環境を守るために何が必要かを、サハリン油田開発主体など8機関の発表を交えて考えました。